私たちは過去よりも未来を重視しているのか？ *

山名諒・藤山拓夢

概要

Our lives are temporally asymmetrical. Derek Parfit once presented cases in which we have a future-bias, a bias that we want pain to be in the past and pleasure to be in the future. Although his cases intuitively seem to show that future-bias is rational, lately some philosophers attack this traditional view. They first demonstrate that in some cases future-biased behaviours would be irrational and then from these cases conclude that such behaviors are irrational in general, including even Parfit's cases. Next, they explain why we would behave with future-bias in Parfit's cases but not in the clearly irrational cases that they present. We don't focus on the rationality of future-bias but on the explanations they give for why our attitudes show future-bias only in Parfit's cases. In their discussion, it is assumed that we have a general disposition to discount the value of past experience. We argue against this in our paper. Philosophers refer to empirical evidence that shows we have some kind of future-bias. Nevertheless, this evidence does not show that we have future-bias when we directly compare future experiences with past ones but only that future experiences are more highly valued in trans-personal studies. This paves the way to thinking that Parfit's cases are unique and that we generally don't discount the value of past experience. After pointing out why the existing accounts of our reactions fail, we present a hypothesis about why we prefer pain to be in the past in Parfit's cases and not in others. This paper illuminates the fact that "future-bias" is indeed not a single phenomenon and that further examination is required.

Keywords：未来バイアス、時間、非対称性、パーフィット、快苦

* *CAP* Vol. 13 (2021) pp. 83-106. submitted:2020.11.28 accepted: 2021.09.29 category: 原著論文 published: 2021.10.26.

序

私たちの生は、ふつう未来と過去とのあいだで対称的ではない。来週末に計画している旅行は楽しみだが、半年前の休暇を懐古はしても楽しみにはしない。遊園地でジェットコースターの列に並んでいるあいだは恐怖を感じるが、コースターから降りれば恐怖は消え去っている。苦労して対策してきた試験が終われば、もうこれ以上勉強しないですむと思って安堵する。このように、ある出来事が「いつ」生じるかはときに私たちにとって大きな違いをもたらす。

こうした時間的非対称性の一つの例として、私たちが未来の善や害悪を過去の善や害悪よりも重視する傾向性――「未来バイアス (the bias towards the future, future-bias)」をもつ、ということが指摘されてきた[*1]。未来バイアスは、伝統的には以下に見る D. パーフィットによる巧妙な事例と結びつけて論じられてきた。

> 私はある種の手術を受けるためにある病院に入院している。この種の手術は完全に安全で、常に成功している。〔……〕私は外科医と協力しなければならないから、麻酔を受けられない。〔……〕現在の新しいポリシーの下では、その手術は大変痛いので、患者は後でそれを忘れるようにさせられる。患者の最新の数時間の記憶を消去する薬があるのである。
>
> 私は今目覚めたばかりである。私は眠りについたことを思い出せない。私は私の看護師に、私の手術がいつなのか、またそれがどれだけ長くかかるのかは決まったかと尋ねる。彼女は、自分は私と別の患者の両方についての事実を知っているが、どちらの事実が誰にあてはまるのか思い出せないと言う。彼女が私に真実だと言えることは次のことだけである。私はきのう手術をした患者かもしれない。その場合、私の手術はこれまでになかったほど長くて、10 時間かかった。あるいは私はきょうこれから短い手術を受けることになっている患者かもしれない。私は 10 時間苦しんだか、あるいはこれから１時間苦しむことになっているかのいずれかである。
>
> 私は看護師に、どちらが真なのかを確かめてくれるように頼む。彼女がいなくなっている間、私がどちらが真であることを望んでいるかは私には明らかである。もし前者が真であると知ったならば、私は大いに安堵する（relieved）だろう。（[Parfit, 1984=98, pp. 165-6=234]。訳はおおむね邦訳に従うが、適宜修正した箇所がある）

上の事例（ケース１）では、「私」が直近の記憶を失った状態で目を覚ます。「私」は自分が昨日 10 時間の苦しい手術を受けた患者か、今日これから１時間の苦しい手術を受ける患者かのどちらかであることを知る。私たちの多くは、自分がこのケースの「私」であると想像したときに前者の患者であることを望むだろうとパーフィットは言う。

忘却を含むことが無関係だと示すため、パーフィットはもう一つの事例（ケース２）を挙げる。

[*1] 私たちがある種の未来バイアスをもつことを示唆するものとしていくつかの実証的な研究が挙げられる。[Caruso et al., 2008; Lee et al., 2020; Greene et al., 2021] を参照。前の２つについては後に触れる。

ケース２では、「私」は過去に手術を受けたことを覚えているが、それがどれくらいの長さだったかはわからない。ここでもまた、看護師は二人の患者についての事実を覚えているが、「私」がそのどちらなのかは思い出せない。「私」は昨日５時間の苦痛に耐えて手術が終わった患者であるか、昨日２時間の苦痛に耐えてこれからさらに１時間の苦痛を待つ患者であるかのどちらかである。このケースでも同じことが言えるだろう [Ibid., p. 166=236]。

二つのケースを合わせて**「パーフィット事例」**と呼ぶことにしよう[*2]。どちらのケースでも、後者の患者であった方が「私」の受ける痛みの総量はずっと少ない。もし私たちが痛みの時間的位置の違いにまったく頓着しない（indifferent）ならば、後者の患者であることを望むはずだ。しかし、パーフィットの想定が正しければ、私たちの多くは前者の患者であることを望む。苦痛の総量が大きくなっても痛みが過去である方の患者であることを望むのだから、未来バイアスをもつ、と言える[*3]。

パーフィット事例は、私たちがある種の未来バイアスをもち、そしてその未来バイアスをもつのは不合理ではないという主張を直観的に強く支える。これに対して、未来バイアスは不合理だと主張する論者――「未来バイアス不合理論者」と呼ぶことにする――が近年現れており、未来バイアスが不合理か否かを巡って論争が生じている。こうした論争に対し、未来バイアスが不合理か否かに結論を下すことは本稿の主眼ではない。本稿の主眼はそれよりも手前のところ、すなわち未来バイアスと呼ばれる私たちのふるまいをどのように捉えるべきかを明白にすることにある。そもそも私たちがどのような未来バイアスをもっているのかを正確に捉えなければ、その合理性について適切な仕方で論じることもできないだろう（この点については結論で論じる）。

本稿は以下のように進む。第１節では、未来バイアスを巡ってどのような議論がなされているのかを概括する。本稿では不合理論者の挙げる二つの事例に着目する。彼らの挙げる事例は、私たちが過去の経験のもつ善や害悪を割り引かない（つまり未来バイアスを示さない）ように見えるものである。これらの事例で未来バイアスを示すことは不合理であり、彼らはそこから未来バイアス一般が不合理だと結論する。こうした論脈のために、不合理論者たちは、どうして未来バイアスが不合理であるのかの説明に加えて、どうして私たちが彼らの提示する事例では未来バイアスを示さないが、パー

---

*2 パーフィットがこうした事例を挙げた意図について簡単に触れておこう。この箇所におけるパーフィットの目標は、彼の論敵である「自己利益説 (Self-interest Theory)」――合理性についての理論で、各人に「結果が彼にとって最善であって、その結果は、彼の生が可能な限りうまく行くようにするものである」[Parfit, 1984=98, p. 3=3] という目標を与える――が、いくつかの当惑的な結論のうちどれかを引き受けることになると示すことにある。その当惑的な結論の一つが、この事例において直観的に合理的であるように思われる未来バイアスを不合理なものとして断罪してしまうことである。

パーフィット自身の未来バイアスに対する態度はいささか複雑であり、いくつか注記しておきたい。第一に、自己利益説は私たちが自身の未来のあらゆる部分を均等に気にかけるべきであることを含意するので、そもそも未来バイアスが合理的であればその時点で自己利益説は誤りであるはずだが、彼はそうした直接的な道のりをとらない。この点に関しては、B. ヘッデンの整理が明確である [Hedden, 2020, pp. 38-9]。第二に、パーフィットは未来バイアスを不合理だと述べることが私たちの多くにとって説得力をもたないと主張するが、この本のなかで自分の主張として未来バイアスが不合理ではないと述べているわけではない。第三に、合理的か否かとは別の問題として、〈未来バイアスをもつことは私たちにとって悪い〉ということをこの後の箇所で主張している [Parfit, 1984=98, pp. 174-7=247-50]（この主張への反論としては [Scheffler, 2021, sec. 3] を見よ）。

*3 パーフィット事例そのものに関して、ほんとうに私たちの多くが手術を終えた患者であることを望むのかを検証した研究は残念ながらまだない。しかし、この事例は未来バイアスに関する文献の多くで引用されており、反対するデータのない限り、私たちがこうした反応をすると仮定して議論を進めることは妥当だろう。

フィット事例では未来バイアスを示すのかの説明を与えている。本稿で注目するのは後者の説明である。第 2 節ではまず既存の三つの説明を取り上げる。これらは私たちがどのようなときに未来バイアスを示し、どのようなときに示さないのかの条件を与えようとするが、いずれも不十分であることを指摘する。第 3 節では、それに代わる説明を模索し、本稿のとる立場を示す。これらの議論を通して最終的に、「未来バイアス」と言われているものは単一の現象ではなく、実際には複数の現象を含んでいることを主張する。

1 未来バイアスを巡ってどのような議論がなされているのか

1.1 未来バイアスとは

用語法を整備しておこう。「未来バイアス」の定義について、本稿では、T. ドーアティによる次のようなものに依拠することにする。

> **善についての未来バイアス選好 (Future-biased Preferences(Good))**
> あるひとが善 G に関して未来バイアス選好をもっているのは、そのひとが G が過去にあることよりも未来にあることを好むときかつそのときに限る（他のすべてのことは同じだとする）。[Dougherty, 2015, p. 2]

害悪については、未来よりも過去にあることを好むならばそのひとは未来バイアス選好をもつとされる。こうした選好を示すとき、そのひとは過去の価値を割り引いている (discount) という表現が使われる。

「善G」は善のタイプを指す。私たちが未来バイアスを示す対象として挙げられてきたのは、もっぱらヘドニックな経験——つまり、快楽や苦痛を伴う経験である [Parfit, 1984=98, p. 160=226-7]。当人にとって善であったり害悪であったりするような出来事であっても、会社のパーティーで酔っ払ってした恥ずかしい失敗 [Brink, 2011, p. 379] や嫌な会議、配偶者にされる浮気 [Hare, 2013, p. 508] のような場合には、私たちは未来バイアスを示さないと考える論者もいる。

一般に、未来バイアスは「時間バイアス」の一種だとされる。時間バイアスは、私たちが善や害悪の時間的位置についてもつ選好の総称である。未来バイアスのほかに、近さバイアス (the bias towards the near, near-bias) が有名である。近さバイアスとは、他のすべてのことが同じとき、善が遠くの未来よりも近くの未来にあることを、害悪が近くの未来よりも遠くの未来にあることを好む選好を指す。

こうした時間バイアスに対し、ドーアティが合理的だと考える選好のあり方は次のようなものである。

> **時間的に中立な選好 (Temporally Neutral Preferences)**
> あるひとが善 G に関して時間的に中立な選好をもっているのは、そのひとが現在の瞬間に関する G の時間的位置に頓着しないときかつそのときに限る（他のすべてのことは同じだとする）。[Dougherty, 2015, p. 2]

ドーアティの定式化には「他のすべてのことは同じだとする」という文言がある。時間バイアスはこうした「他のすべてのことが同じとき」という文言によって定義されることがしばしばあるが、この文言にはいくつかの解釈の余地がある。たとえば、100 万円もらえることになったとき、多くの人はそれが 20 年後であることよりも今すぐであることを望むとしよう。これは遠い未来の善よりも近い未来の善を好む例だが、しかしこれが「他のすべてのことが同じ」うえで遠い未来の善よりも近い未来の善を好む例なのかは定かではない。私たちが今すぐ 100 万円をもらえることを好むのは、20 年後に自分が生きているかわからないという不確実性のためかもしれないし、今すぐもらえた方が投資によってさらに増やせる機会が多いためかもしれないし、性格や欲求などの心理的特徴が変わってしまった 20 年後の自分を気にかける理由が今の自分を気にかける理由よりも乏しいと考えるためかもしれない。こうした別の要素ではなく、純粋に時間的位置だけに基づく選好は「純粋時間バイアス (pure time preference)」と呼ばれてきた [Lowry & Peterson, 2011, pp. 490-2; Żuradzki, 2015, pp. 159-63]。「他のすべてのことが同じとき」を強くとれば純粋時間バイアスだけが時間バイアスだということになるが、弱くとればそれ以外も時間バイアスでありうることになる。ある選好が時間的位置のみに基づいているかを確定することは簡単ではないため、本稿では「他のすべてのことが同じとき」を弱く解釈し、純粋時間バイアス以外も時間バイアスでありうるという用語法をとる[*4] 。

未来バイアスを巡る問題を二つに区分しよう。一つは、〈私たちがもつとされる未来バイアスとは実際にどのようなものか〉という**記述的問題**である。記述的問題のなかでも多くの議論がなされてきたのが、〈私たちのもつ未来バイアスはどのような条件のもとで発現するのか〉という発現条件を巡る問題だ。あるひとがなんらかの未来バイアスをもっているとしても、そのひとが過去にあるあらゆるタイプの善や害悪よりも未来にあるあらゆるタイプの善や害悪をつねに重視するとは限らない。多くの論者が、私たちが善や害悪に対して未来バイアスを示すかは、さらなる条件に依拠すると考えてきた。先に挙げたように、多くの論者は私たちの未来バイアスはヘドニックな経験に対してだけ示されると考えてきた。また、未来バイアスには自己の場合と他者の場合とで非対称性があり、他者の場合には未来バイアスを示さない場合があると主張する論者もいる[*5] [Parfit, 1984=98, pp. 181-3=256-60]。C. ヘアによれば、彼の尋ねた多くのひとは、他者が距離的に近くにいると想定した場合には未来バイアスを示したが、遠くにいると想定した場合にはそうではなかったという [Hare, 2008, p. 270]。さらに、私たちの未来バイアスが純粋時間バイアスであるのか、それとも他の要因によって生じているのかも、発現条件を巡る問題とかかわるだろう。

もう一つは、〈未来バイアスに従って行為をすべきなのか〉という**規範的問題**である。とりわけ、未来バイアスという選好そのものの合理性、およびその選好に従って行為することの合理性が焦点となってきた。次にどのような議論がなされてきたかを概観する。

---

*4 3.1 の最後の段落で再びこの点に立ち戻る。

*5 未来バイアスがどの程度こうした特徴をもっていると言えるのかについては慎重であるべきだろう。たとえばグリーンたちは、彼らの実験に基づいて、未来バイアスの発生に関してヘドニック／ノンヘドニック、一人称／三人称という区別はそれほどクリアカットなものではないと主張している [Greene et al., 2021]。ただし、本稿ではこの区別の妥当性には立ち入らない。

1.2 未来バイアスの合理性を巡ってどのような議論がなされてきたのか

これまでになされてきた未来バイアスの不合理性を主張する議論を、大きく３つに分類することができる[*6]。以下では、３つの分類を概覧し、未来バイアス不合理論者によって挙げられる二つの事例――「グリーン＆サリヴァン事例」と「ドーアティ事例」と呼ぶ――を紹介する。

第一に、未来バイアスの恣意性を主張する議論がある（[Parfit, 1984=98, pp. 123-6=174-7; Brink, 2011, pp. 377-8; Sullivan, 2018, pp. 108-9]。[Lowry & Peterson, 2011; Hare, 2013, pp. 510-3] も参照）。大まかに言えば、未来でなく過去であること（時間的位置の相違）は恣意的な区別にすぎず、合理的な行為者はこうした恣意的な区別に基づいて選好を変えるべきではない――それゆえ未来バイアスは不合理だ、というものである。こうした議論の射程は、未来バイアスのみならず近さバイアスも含めた時間バイアス全般に及ぶ。

恣意性を主張する議論が成功するためには、私たちのもつ未来バイアスが実際に重要でない区別に基づいている必要がある。すなわち、このタイプの批判は、私たちの未来バイアスがそもそもどのような相違に基づいているかという記述的問題に部分的に依存する。たとえば、先に触れたように、それが不確実性による影響や、心理的連続性の減少、あるいは人生の物語的構造（[Velleman, 1991] で言われるような）のためであれば恣意的な区別とは言い難いかもしれない。これは、規範的問題と記述的問題の結びつきを示す一つの例である。

第二に、未来バイアスに従って行為すると、行為者の満たすべき合理的規範――たとえば自分の人生の全体が可能な限り上手くいくようにすること――を破ることになると主張する議論がある。一つの例は、P. グリーンや M. サリヴァンによる「悔いのない人生論証 (the No Regrets Argument)」だ [Greene & Sullivan, 2015; Sullivan, 2018, ch. 8]。この論証は、次のようにまとめることができる（サリヴァン自身の定式化に若干の修正を加えている）。

前提１（弱い予見原理 (Weak Forecasting) [*7]）
ある行為者がとりうる選択肢の影響について十分で正確な情報をもっているなら、その行為者が、後悔するだろう選択肢よりもけっして後悔しないだろう選択肢を選ぶことは合理的に許容される (rationally permissible)。

前提２
弱い予見原理が真のとき、もし絶対的な過去の割引[*8] が合理的に許容されるならば、より大

[*6] ほかに、私たちの未来バイアス選好がきわめて限定されたものであることを強調する論者もいる [Greene & Sullivan, 2015, pp. 969-70; Brink, 2011, pp.378-9]。こうした論者は、私たちの未来バイアス選好が他人の場合には働かず自分の場合にのみ働くという考えを受け入れたうえで、その発現条件の狭さからそうした選好に従うべきではないことを示唆する。ただし、なぜ発現条件の狭さが不合理性とつながるのかは論者によって異なる。

[*7] [Greene & Sullivan, 2015] では、この原理は Weak No Regret 原理と呼ばれていた。

[*8] グリーン＆サリヴァンは、未来バイアスには絶対的な過去の割引と非絶対的な過去の割引の二つがありうると考えている。前者は、過去の経験の価値に一切の価値を割り当てないものであり、後者は、未来の経験より少ないがいくらかの価値を割り当てるものである。ここでは未来バイアスが絶対的なものと仮定している。グリーン＆サリヴァンは、パーフィット事例は未来バイアスが絶対的だと考える理由を与えること、また、かりに未来バイアスが絶対的ではなかったとしても同じ問題が生じることを主張している [Greene & Sullivan, 2015, pp. 961-5]。

きな現在の善よりもより小さな後の善を好むのは合理的である。

前提３（「成功原理 (the Success principle)」）

どんな時点においても、合理的な行為者はその今後の生が可能な限りうまくいくことを好む。

前提４

より大きな善よりもより小さな善を好むことは、自身の今後の生[*9] が可能な限りうまくいくわけではないことを好むことである。

結論（未来バイアスの不合理性）

絶対的な過去の割引は合理的に許容されない。

前提１の弱い予見原理で言われる「後悔」とは、情動的・認知的な状態というよりも、「自身がそうしなかったことを選好すること」[Greene & Sullivan, 2015, pp. 957-8] を言う。この意味での後悔は、私たちが未来に向けて計画を立てることのなかで重要な役割を果たすものであり、こうした役割を踏まえれば弱い予見原理は説得力をもつとされる。

前提２は、次のような事例から擁護される。ビリーは、(1) 将来のある時点で１枚のクッキーをもらえるか、(2) 今すぐ２枚のクッキーをもらえるか、どちらかを選べるとしよう。（クッキーを食べることはビリーにとって幸せなことであり、カロリーや糖質の摂りすぎといった有害な副作用を考えないこととすれば）明らかに (2) を選択した方が合理的である。しかし、ビリーが未来バイアスをもつとき、彼は (1) を選ぶかもしれない。(2) を選んだ場合、彼は２枚のクッキーを食べ終わるやいなや (1) を選んでいたことを選好するようになる（２枚のクッキーはすでに過去になってしまったが、(1) を選んでいれば１枚のクッキーはまだ未来にあっただろうから）。よって、ビリーは後悔することになる。いっぽう、(1) を選んだ場合、クッキーを食べるまでは過去の２枚のクッキーより未来の１枚のクッキーの方を選好し、クッキーを食べ終えたあとは、彼はすでに過去になってしまったどちらの選択肢にも価値を置かない。よって、ビリーは後悔することはない。(2) を選べば後悔するが、(1) を選べば後悔しないのだから、弱い予見原理より、ビリーが (1) を選ぶことは合理的に許容されることになってしまう [Greene & Sullivan, 2015, pp. 960-1]。この事例を**「グリーン＆サリヴァン事例」**と呼ぼう。

しかし、前提２は、合理性や福利についての一定の前提（前提３と４）と合わさったとき、未来バイアスが不合理だという帰結をもたらす（前提３と４の成否には議論の余地があり、サリヴァンはそれぞれに擁護を与えている [Sullivan, 2018, pp. 24-33] が、本稿では割愛する）。以上が悔いのない人生論証である。

第三に、選好一般が満たすべき合理的規範を未来バイアス選好が満たさないことを主張する議論がある。たとえば、いくつかの前提をもとにすると、未来バイアス選好をもつことで非推移的な選好を示してしまう――結果 A より結果 B を好み、結果 B より結果 C を好むにもかかわらず、結果 C よ

[*9] サリヴァンは単に「自身の生 (one's life)」と書いているが、論証上ここは前提 3 の「今後の生」と同義であると解釈した。

りも結果 A を好む場合がある――とする主張がなされてきた（[Dougherty, 2011; Hare, 2008] [*10] など）。標準的な意思決定理論において、完備性や推移性を満たすとき、選好は合理的であるとされる。この意味で選好が不合理であることは、私たちがその選好に従うべきでないこととただちにつながるわけではなく、この点に関してはさらなる議論が必要になる。たとえば、選好が非推移的である場合、その行為者はマネー・ポンプ（お金の無限汲み出し）[*11] に対して脆弱であることがしばしば挙げられる [Dougherty, 2011, pp. 523-4; Ibid., 2015, p. 10] ――こうした論拠に訴えるならば、選好の非推移性に訴える議論は、行為者の満たすべき合理的規範を破ることになるという第二の議論の一種になる。

選好の推移性についての議論を含む、ドーアティの「混合トレードオフ論証 (the Mixed Tradeoff Argument)」[*12] を取り上げよう。ドーアティは、ヘドニックな経験をどれくらい他の種類の善や害悪に交換するかに焦点を当てる。こうした交換は私たちの生活のなかでありふれている。たとえば、私たちは快楽をもたらす経験のためにお金を払ったり、自身の目標の達成のために苦しい努力を重ねたりする（こうした交換を、サリヴァンは「混合トレードオフ」と呼んでいる）。ドーアティはこうした混合トレードオフの場合をもとに、次のような論証から未来バイアスの不合理性を訴える。

前提１（固定された「為替レート」の要請）
すべての善とすべての個別的なヘドニックな経験について、その経験が未来にあるときに一定量の善とのあいだの相違に頓着しないならば、その経験が過去にあるときにも同じ量の善とのあいだの相違に頓着しないことが合理的に要求される。

前提２（選好の推移性の要請）
もし A と B のあいだの相違に頓着せず、B と C のあいだの相違に頓着しないならば、A と C のあいだでも相違に頓着しないことが合理的に要求される。

結論（未来バイアスの不合理性）
それゆえ、未来にある個別的なヘドニックな経験と過去にある同じ経験のあいだの相違に頓着しないことが合理的に要求される。[Dougherty, 2015, pp. 11-2] [*13]

前提１では、混合トレードオフの場合に、ヘドニックな経験が過去にあるときと未来にあるときで交換の比率が一貫しているべきことが主張される。たとえば、ある食事をとる経験が未来にあるときに払う金額が 1000 円であるならば、同じ経験が過去にあるときにも 1000 円を払うべきである。もしこの主張が成り立てば、前提２の選好の推移性の要請から、ヘドニックな経験どうしの場合に、経験が過去にあるか未来にあるかについて無頓着であるべきことが帰結する。食事の経験が未来にあろ

[*10] ただしヘアは未来バイアスを不合理ゆえに棄却すべきだと考えているわけではない。

[*11] たとえば、結果 A より結果 B を好み、結果 B より結果 C を好むにもかかわらず、結果 C よりも結果 A を好む人がいたとしよう。彼は A を B に変えるのに 100 円、B を C に変えるのに 100 円、C を A に変えるのに 100 円払うとすると、その人はたんに A → B → C → A の順で交換するだけのことに 300 円を払うことになってしまう。

[*12] この名前はサリヴァンの本による [Sullivan, 2018, p. 89]。

[*13] サリヴァンはドーアティの省略しているもう一つの前提――「そのひとは混合トレードオフに直面し、なんらかの為替レートのもとでその善と未来の経験のあいだで頓着しない」をつけ加えている。彼女の指摘するとおり、この前提がなければ論証は非妥当である。

うと過去にあろうと 1000 円を支払う（双方の経験と 1000 円の保持とのあいだの相違に無頓着である）のに、その食事を食べるという経験が過去にあることよりも未来にあることを望むならば、選好の推移性は破られてしまうからだ。

ドーアティは二つの道筋から前提１を擁護する。一つは具体例によるものだ。混合トレードオフの場合に交換の比率が一貫していない事例を挙げ、私たちはそのようにふるまわないこと、そしてそうしたふるまいが不合理であることを彼は示唆する（この事例を**「ドーアティ事例」**と呼ぼう。元論文では三つの事例が挙げられているが、ここでは最後の「レストランの事例」だけに焦点を当てる）。未来バイアスをもつヴィクトリアという人物を考えよう。彼女にとって、快苦がどのくらいの善悪に相当するかは単純に受ける時間に比例するとしよう。また、彼女は５時間の過去の快楽と１時間の未来の快楽のあいだの相違に頓着しないとかりに規定しよう。こうした規定は、論証の一般性を妨げない。

ヴィクトリアは大好きなレストランで食事をすることに決めた。このレストランの経営者は、資本主義的な市場が値段を決める仕方に反対している。そのため、このレストランでは料理の価格が決まっておらず、その食事が彼らにとってどれくらい価値があると評価するかに応じて寄付をするよう客のそれぞれに求めている。過去の経験から、ヴィクトリアはそこでの食事が 50 分ほどかかること、彼女にとってこのレストランの食事は１分あたり 100 円ぶんくらいの価値があるだろうことを予想する。その予想はまったく的中し、彼女は 5000 円を払おうと財布に手を伸ばす。だがこのとき、ヴィクトリアは 50 分間の快楽がもはや過去になってしまったことを認識する。未来バイアスのために、彼女にとって過去の 50 分間の快楽は未来の 10 分間の快楽と等価である。このレストランの未来の 10 分間の食事は彼女にとって 1000 円ぶんの価値であるため、その食事の快楽に払えるのはせいぜい 1000 円ぶんだと彼女は考える[*14] 。ヴィクトリアはレストランのポリシーに従い、レストランに 1000 円を置いて去る。ヴィクトリアははじめ食事に対して 5000 円を払おうとしており、その予測が覆ったわけではない。にもかかわらず、食事の後には 1000 円しか払おうとしないのは奇妙であり、不合理だ、とドーアティは示唆する [Dougherty, 2015, pp. 6-7]。

しかし、ヴィクトリアのふるまい方を奇妙だと認めても、それが不合理であるとは承服しかねるひともいるだろう。ドーアティはもう一つ、次のような一般的な議論から前提１を擁護する。パーフィット事例では私たちは未来バイアス選好を示す傾向にあるのに、ドーアティ事例では示さない傾向にあるのはなぜだろうか。ドーアティによれば、それは私たちの思考が区画化 (compartmentalized) されており、ヘドニックな経験に対して二つの視点をとれるからだ。一つは、今の私の視点だ。行為は必然的にある人称的・時間的次元をもつ特定の視点から行われなければならない。この視点のために私たちは未来バイアスを合理的なものとみなす直観をもつようになる。しかし、私たちはもう一つ、人生全体の視点（自分を時間的に延長した行為者として捉える視点）ももっている。この視点に立つとき、私たちは今の自分の視点から一歩引いて、人生全体の質に対してどれほど貢献するかに基づい

[*14] この箇所のドーアティの記述はいささかミスリーディングなように思われる。私たちが過去のヘドニックな経験の価値を割り引くような傾向性をもっているとしても、過去の経験に対してどれくらいの金額を支払うかを考慮する際に、それと等価な未来の経験との換算を経由する必要はない。ヴィクトリアがこうした心理的操作をする人間として描かれていることで、ヴィクトリアのふるまいがいっそう奇妙に思わせられるようになってしまっている。

て時間的に中立な選好を形成する。ドーアティの主張は、ヘドニックな経験を他の善と交換するとき、こうした時間的に中立な選好に基づくこと（「為替レート」が固定されていること）が合理的に要求される、というものだ。というのも、過去と未来の私が同じように自分である限り、私たちは過去や未来の自分も承認 (approve) するような共通の視点を考える合理的なプレッシャーにあり、すると適切なアプローチはヘドニックな経験と何であれそれと交換する善の内在的な（時間的位置に依らない）価値だけを考えることだからだ [Ibid., pp. 7-8; 13-5]。

以上のような未来バイアス不合理論に対しては、いくつかの反論がなされてきた。たとえば、D. ドーシーや S. シェフラーといった論者は、それぞれの論証の前提を批判する議論をしている[*15] 。本稿ではしかし、直接的に論証の前提を検討するのではなく、少し違った角度から未来バイアスを検討したい。本稿では、上記のような未来バイアス不合理論の規範的主張それ自体を検討するのではなく、彼らの議論が暗に依拠している記述的主張——そもそも私たちがどのような未来バイアスをもつのか——を検討したい。次節以降で、私たちのもつ未来バイアスは、グリーン＆サリヴァン事例やドーアティ事例で想定されているようなものであるのかについて論じる。

2　なぜパーフィット事例が特殊なのか

2.1　既存の説明の誤り

グリーン＆サリヴァン事例やドーアティ事例にはどこか不思議なところがある。おそらくその原因の一つは、私たちは未来バイアスをもっているはずなのに、ビリーやヴィクトリアのようにふるまわないように思われる点にあるだろう。現実にはビリーやヴィクトリアの置かれたような状況で、私たちの多くは１枚のクッキーの方を選んだり、1000 円しか置いていかなかったりしないだろう。この点はグリーン＆サリヴァンやドーアティも認めている（つまり、パーフィット事例では過去の経験の価値を割り引くが、グリーン＆サリヴァン事例やドーアティ事例では割引は生じないという同意がある）。グリーン＆サリヴァンもドーアティも、この事態に説明を与えようとしている。なぜ私たちは未来バイアスをもっているはずなのに、ビリーやヴィクトリアのようにふるまわないのだろうか。以下ではこの問いに対してこれまでの論者の挙げた回答を検討する。

グリーン＆サリヴァンは、私たちが実際にはビリーとは違って将来の１枚のクッキーよりも今すぐもらえる２枚のクッキーの方を選ぶ理由を、「近さバイアス」によって説明する。私たちは近さバイアスをもつので、なるべく早く（近い未来に）クッキーを食べたいと思う。この衝動は、２枚のクッキーを選ぶ方に味方する。近さバイアスによるこの衝動が、後悔を避けて１枚のクッキーを選ぼうとする衝動にまさるので、私たちはビリーのようにふるまわないのだ。つまり、未来バイアスの効果が近さバイアスの効果によって打ち消されるために、私たちはグリーン＆サリヴァン事例で未来バイアスを示さない、と考えられている [Greene & Sullivan, 2015, p. 960] [*16] 。

[*15] ドーシーは悔いのない人生論証の前提１、混合トレードオフ論証の前提１に対して反論を与えている [Dorsey, 2017, pp. 361-7]。シェフラーは混合トレードオフ論証の前提１、前提２の双方に反論を与えている [Scheffler, 2021, sec. 8]。

[*16] 正確に言えば、この説明は別の事例についてなされているものだが、本稿で取り上げたグリーン＆サリヴァン事例にも

しかしシェフラーが指摘するように、この理屈だけではなぜ私たちが２枚のクッキーの方を選ぶのかは説明できても、２枚のクッキーを食べ終わった後に私たちがなぜ後悔を覚えないのかは説明できていない。近さバイアスは未来にしか作用しないので、クッキーを食べ終えた後では近さバイアスが関与しない。そのため、未来バイアスが効果を発揮して、私たちは後悔を覚えるはずだ。だが、１枚ではなく２枚のクッキーを食べ終えたあとで、それが過去になったときに価値を割り引いて〈１枚のクッキーを選んでいた方が良かった〉と後悔するひとはあまりいないように思われる。

シェフラー自身はその理由を次のように説明する。グリーン＆サリヴァン事例においては、(1) 後悔を引き起こすとおぼしき結果が自身の選択の結果として生じている（これはパーフィット事例と対照的である）。さらに、(2) その選択をする時点において、２枚のクッキーはドーアティの言うところの区画化された二つの視点（選択時の視点と、人生全体の視点）のどちらからも好ましいものである。選択時の視点では、２枚のクッキーと１枚のクッキーはどちらも未来であるから２枚のクッキーの方が好ましく、人生全体の視点でも、２枚のクッキーを食べる人生の方が１枚のクッキーを食べる人生よりも好ましい。シェフラーの仮説は、この二つの条件が成立するときには、私たちは未来バイアスを示さない、というものだ。またこのことは、ドーアティ事例において、食事の前に判断した金額を食後に払うとしても私たちが後悔しない理由も説明する。食事の前の視点でも人生全体の視点でも、5000 円ではなく 1000 円払うことを好ましいとは思われないからだ。こうした事例では、未来バイアスが発現しないために、そもそも避けられるべき後悔が存在しないのだ[*17] [Scheffler, forthcoming, sec. 9]。シェフラーの捉えようとしているアイディアは、おそらく次のようなものだろう。あるひとが時間バイアス選好をもつとき、そのひとの時間的位置によって選好のパターンが変わることになる。一般に、過去に自分がした選択について考えるとき、私たちは選択時の選好や認知的状態がどのようなものであったかを考慮に入れる（いわば、選択時の視点に立ち返って考える）。こうした考慮を踏まえて今の選好があるのだから、選択時の視点のもとで望ましかった（また、人生全体の視点のもとでも望ましい）ような判断については、そうでなければ良かったとみなさないのだ。こうしたアイディアは、私たちの後悔の実践の一端を捉えているかもしれない。

ドーアティは私たちがヴィクトリアのように 1000 円を置いていくことはない理由を次のように説明する。

> 一方では、ヴィクトリアに関する事例のように、他の善とヘドニックな経験をどのように交換すべきかについて考えるときには、私たちは時間的に中立な選好を形成する傾向がある。しかし他方で、パーフィットの手術事例のように、ヘドニックな経験が過去であってほしいか未来であってほしいかについて考えるときには、未来バイアス選好を形成する傾向がある。[Dougherty, 2015, p.13]

つまりドーアティの説明図式によれば、〈ヘドニックな経験どうしの間の選好〉には未来バイアスが、

同じ理屈が当てはまる。また、すぐ後に引用するシェフラーも、グリーン＆サリヴァン事例の説明としてこれを挙げている。

*17 シェフラーはグリーン＆サリヴァン事例について類似した別の説明（私たちは後悔をするのだが、区画化の傾向性のために、私たちは実践においてそれを避けようとしないというもの）も与えているが、本稿では省略する。

〈ヘドニックな経験と他の善の間の選好〉には時間に中立な選好が対応する。パーフィット事例は前者であるために未来バイアスが発現して過去の経験の価値を割り引くが、ドーアティ事例は後者であるために過去の経験の価値を割り引くことはない、というわけだ。

しかしシェフラーやドーアティの説明が私たちの実践の十分な説明になっているかは疑わしい。彼らの説明よりも、私たちが過去の価値を割り引かない範囲は広いように思われるからだ。次の事例を考えてみよう。

> **〈新・レストラン事例〉**抽選に応募して、レストランでの食事券を手に入れた。その食事券を持っていれば、一日限定で 2000 円のコースを無料で食べることができる。今日はちょうどその当日で、あなたはそのレストランに向かう準備をしている。しかしあらためて当選を知らせるメールをよく読んでみたあなたは、自分が当選したのは B コースで、A コースがあったことに気づいた。当選者はランダムで A コースと B コースのどちらか一方の食事券がもらえることになっていたのだった。A コースの当選者は一日限定で 4000 円のコースを無料で食べることができ、その日は昨日である。自分の嗜好からしても A コースの方が B コースよりもずっと良く、昨晩の予定は空いていた。

このとき、〈Bコースに当選していた現実の状況〉と〈Aコースに当選していた架空の状況〉を比べたとき、あなたはどちらが良かったと思うだろうか。多くのひとが「A コースに当選していればよかった」と思うのではないか。B コースに当選したこと自体は喜ばしいことだったとしても、A コースではなく B コースに当選していてよかったとは思わないだろう。私たちは（より多くの）快楽をもたらす経験を得られなかったことを後悔するだけでなく、たとえそれが自分のコントール外にあっても、過去のありえた経験の価値を割り引いたりはしないように思われる[*18]。

もし以上のことが正しければ、次のことが言えるだろう。第一に、シェフラーの見解が正しくとも、それは自分の現状が選択の結果であるような事例にのみ適用され、新・レストラン事例における私たちのふるまいを説明できない点で限定的である。後悔に関してシェフラーの指摘が正しかったとしても、私たちが価値を割り引く状況と割り引かない状況の線引きにはそれ以上の何かがある。第二に、新・レストラン事例で私たちが過去の経験の価値を割り引かないのだとすれば、グリーン＆サリヴァン事例において私たちが後悔しないのも、そもそも過去のありえた経験の価値を割り引かないからだと推察される。というのも、新・レストラン事例の状況はグリーン＆サリヴァン事例でビリーが未来の１枚のクッキーを選んだ直後の状況から〈現状が自分の選択の結果である〉という要素を取り除いたものにすぎず、もし新・レストラン事例で私たちが過去の経験の価値の割引をしていないのであれば、グリーン＆サリヴァン事例でも同じことが言えると推測されるからだ。以上の理由から、シェフラーの説明は満足いくものではない。第三に、新・レストラン事例において過去の経験の価値

[*18] 次のような状況を考えてもよい。先の事例で A コースの日付（たとえば 4 月 3 日としよう）が書かれており、実際にそれは昨日なのだが、あなたは今日の正確な日付を忘れており、今日が 4 月の一週目であるということまでしか覚えていないとする。そのとき、あなたはその一日限定の A コースが昨日なのか今日なのか、または明日であるかを確認してはじめて自分の置かれた現状を評価するだろうか。特別な事情がない限り、日付を知るまでもなく自分が A コースを食べられなかったことを残念に思うだろうし、A コースの日付が昨日であることを知った途端、そのことを理由にそれほど残念だと思わなくなったりはしないだろう。

を割り引かないということが一般に認められるならば、このことは〈ヘドニックな経験の間の交換〉がかかわる際には未来バイアスが生じるというドーアティの説明の反例にもなる。新・レストラン事例においてはヘドニックな経験の間の選好が問題になっているので、ドーアティの説明が正しければ、未来バイアスが生じるはずだ。したがって、ドーアティのように〈ヘドニックな経験どうしの間の選好〉に未来バイアスを、〈ヘドニックな経験とその他の善の間の選好〉に時間中立的選好をそれぞれ対応させる説明図式は受け入れがたい。かくして、既存の説明——グリーン＆サリヴァンによるもの、ドーアティによるもの、シェフラーによるものはいずれも十分ではないと考える理由がある。

上で見てきた論者は、パーフィット事例を一般化してグリーン＆サリヴァン事例など他の事例においても価値の割引が生じると想定し、未来バイアスが見られないグリーン＆サリヴァン事例やドーアティ事例においてそれぞれ「未来バイアスが生じない何か特別な事情があるはずだ」という考えに至っていると思われる。しかし、そもそもパーフィット事例から、そうした特別な事情がない限り過去の経験の価値を割り引くような一般的な傾向性を私たちがもっているということを導くのは性急なのではないか。以下でそのように考えるべきさらなる理由を確認する。

2.2 実証的な研究

E. M. カルーソらの実験でも、私たちの態度の時間的非対称性が報告されている [Caruso et al., 2008]。この実験は未来バイアスに関わる現状数少ない実証的研究の一つであり、未来バイアスが現れている一例としてたびたび参照されている [Greene & Sulliven, 2015, p. 969 ; Sullivan, 2018, ch. 5]。だが、この実証的証拠はむしろ、パーフィット以降論じられてきた「未来バイアス」という現象がきわめて限定的なものであることを示唆するのである。

カルーソらの実験の目的は、過去と未来の出来事の評価における時間的非対称性について調べることだ。ある調査（Study1）では、コンピューターにデータを 5 時間入力し続ける退屈な作業を 1 か月前（後）にした（する）ところであると想像した場合、どれくらいの報酬を受け取るのが妥当だと考えるかを被験者に尋ねた。被験者は、1 か月前になされた仕事と比較して、1 か月後になされる仕事に対して 2 倍以上（101% 多く）のお金を受け取るべきであると判断した。これは実際には被験者が仕事を行わない仮定のシナリオであるが、他の調査（Study5）では実際の出来事に対する価値の時間的非対称性も調査されている。この調査によれば、冬休みを 3 日延長するためにどれくらいの金額を払う気がある（あった）かを冬休みが始まる 17 日前に尋ねられた被験者は、同じ質問を冬休みが終わった 17 日後に尋ねられた被験者よりも 24% 多く払う気があることが判明した（ただし、休暇の延長によって他の用事が妨げられることはないと想定するよう被験者には伝えてある）。さらにカルーソらの別の調査（Study3）は、こうした時間的な価値の非対称性（Temporal Value Asymmetry : TVA）が感情に基づいているということを強く支持している。すなわち、過去の出来事よりも未来の出来事の方がより強烈な感情を引き起こすため、未来についての判断の程度がより大きくなるのである。

たしかに、上の調査で TVA が生じることは、私たちが未来バイアスをもつことを示唆している。だが、これらの調査がカウンターバランスをとっているということに注意すべきである。つまり、未

来の出来事についての質問に答える被験者と、過去の出来事についての質問に答える被験者は別のひとである。実際、別の調査（Study2）の結果から、同じ被験者が未来と過去の二つの出来事について評価する際には有意な差が見られなかったことがわかっている。たとえば、ある事例（Study2-b）では、被験者は二つのストーリーを読んで、休暇を過ごすための別荘を友人が貸してくれると想像する。一つのストーリーでは、別荘での 1 週間の滞在から帰ってきたところである。もう一つのストーリーでは、まさにこれから別荘に行くところで、1 週間後に帰ってくる。それぞれのストーリーを読んだあと、被験者は友人への感謝の印のギフトとして最もふさわしいワインを一本選んだ（ただし、どれくらい高価なワインを選んだかを友人が知ることで未来の休暇に影響がでないようにするため、休暇から帰って 1 週間経つまで友人がワインを受け取ることはないと想定するよう被験者には伝えられている）。各被験者がどちらか一方のストーリーを読んでふさわしいワインを選ぶ個人間分析（between-person analysis）では、休暇が未来であると想像する場合に、過去であると想像した場合よりも 37% 高価なワインが選ばれた。それに対して、各被験者が両方のストーリーを読んでそれぞれふさわしいワインを選ぶ個人内分析（within-person analysis）では、両者のあいだで有意な差が見られなかった。つまり、一人のひとが未来と過去の経験を意識的に比較する場合には TVA が生じないということである（カルーソらはこの事実を、未来と過去とで異なる評価をすることを私たちが不合理であると考えていることを示すものだと捉えている[*19]）[Caruso et al., 2008]。

カルーソらの実験を一般化できるならば、私たちはある種の混合トレードオフの事例において、未来の出来事だけを提示されたときに過去の出来事だけを提示されたときよりも大きい価値を与える傾向性にある。ただし、未来と過去の両方の出来事を提示されれば、こうした非対称性は消える。こうした傾向性を「カルーソ型 TVA」と呼ぶことにしよう。たしかに、カルーソらの研究を受け入れれば、私たちはある意味での未来バイアスをもっていることになるだろう。しかしこの研究は同時に、グリーン＆サリヴァン事例やドーアティ事例でも発現するような「未来バイアス」を私たちがもっていない可能性を支持する。というのも、グリーン＆サリヴァン事例やドーアティ事例では明らかに、クッキーを食べることやレストランでの食事が過去である場合と未来である場合とを比べて一人のひとがどのように評価するかが問題になっているからだ。したがって、グリーン＆サリヴァン事例やドーアティ事例で未来バイアスを示さないことは――彼らの想定とは異なり――特殊な説明を要するものではなく、むしろ通常のふるまいだと考える理由がある。

本節の冒頭で、これまでの論者たちがどのようにグリーン＆サリヴァン事例やドーアティ事例とパーフィット事例のあいだの私たちの傾向性の違いを説明するかを見た。ほとんどの論者は、私たちが未来の経験に対して過去の経験の価値を割り引くことを前提として、グリーン＆サリヴァン事例やドーアティ事例ではなぜその割引が生じないのかという形で問いを立てている。しかし、上記の点を考慮すると、パーフィット事例から〈特殊な要因がない限り過去の経験の価値を割り引く一般的な傾向性〉を導くのは性急だろう。しかしそうであるならば、そもそもどうしてパーフィット事例では過

[*19] 感謝の印として友人に送るワインを選ぶ Study2-b では、その選択によって利益を受け取るのが自分ではなく他者である点を懸念するひともいるかもしれない。しかし、隣人の引っ越しを手伝い、感謝の印として隣人からもらったクーポンでどの値段のワインを自分のために選ぶかを被験者が答えるという別の実験（Study2-c）でも同様の結果が得られている。

去の経験の価値を割り引くのだろうか。次節ではこの問いに取り組む。

3 パーフィット事例の特殊性はどこから来るのか

3.1 記憶の介在の可能性

なぜパーフィット事例では価値の割引が生じるのだろうか。まず検討したいのは、パーフィット事例の特殊性に記憶のあり方がかかわっている、という可能性である。ケース１では、「私」はたとえ過去に 10 時間の痛みを受けていたとしてもその痛みを忘れている。ケース２では、「私」は過去に痛みを受けたことは覚えているが、しかしその痛みがどのくらいの時間続いたのかを忘れている。パーフィット事例は忘却が絡んでいるが、他の事例はそうではないため、記憶は有力な候補となる。

パーフィット事例の特殊性に記憶が絡んでいることは、ケース１から単純に忘却を抜いた場合を考えてみることで裏付けられるかもしれない。「私」が病院で目を覚ましたとき、昨日 10 時間の苦しい手術を受けた記憶をもっていたとしよう。このとき、今の状況と、昨日手術を受けなかった代わりにこれから１時間の苦痛を待つ患者であった状況とどちらが良かったかを尋ねられたならば、私たちはどう答えるだろうか。たんなる予想にすぎないが、元のパーフィット事例の場合よりも多くのひとが、未来に１時間の苦痛を待つ患者である方が良かったと答えるのではないか（そうでなければ、パーフィットはケース２を新たに考える必要はなく、この事例を挙げるだけで十分だったはずだ）。D. O. ブリンクはこれに近い点を指摘している。彼によれば、パーフィット事例における比較は公平ではない。比較が公平になされるためには、(a) 過去の苦痛を思い出せるようなものにするか、(b) 未来の痛みの予期を妨げるようなものにする必要があるだろう。もしこのいずれかの形で事例を修正した場合、過去への選好が存続するかどうかは定かではないと彼は述べている [Brink, 2011, p. 379] [*20] 。もし元のパーフィット事例と修正後のパーフィット事例で私たちがどちらの患者であることを望むかが変わるとすれば、この変化は未来バイアスに訴えることでは説明できない——苦痛の時間的位置は修正の前後で一切変わっていないからだ。

パーフィット自身の言によれば、パーフィット事例のケース１が忘却を含むのは、苦痛を思い出すことができたならば「比較を混乱させてしまう」[Parfit 1984=98 p. 167=235] からだ。「私」がどちらの患者であるのが良いかを比較するのに必要なのは、苦痛の長さと時制についての信念だけが違うことだと彼は考えている。このパーフィットの主張とブリンクの主張は真っ向から対立するように見えるが、おそらく両方の指摘が真実を突いている。ある経験に対して私たちがとる態度は過去と未来とのあいだでそもそも等質的なものではなく、過去には記憶という付加的な要素がある。それゆえ、

[*20] ただし、比較が対称的ではないとブリンクが考えるのは、これから起こる痛みの予期はそれ自体苦痛を伴うため、他のすべてのことが同じならばこれから起こる（ひいては予期による苦痛を伴う）痛みは思い出せない（ひいては想起による苦痛を伴わない）過去の痛みより悪いだろうからだ [Brink, 2011, p. 379]。予期に伴う苦痛を持ち出すブリンクに対して、ドーシーは次のような反論をしている。パーフィット事例では、「私」が未来の苦痛を予期する時間は十分に短いのだから、予期による苦痛が昨日の手術における 10 時間の苦痛を補うほどのものになるはずがない。また、今日の手術までの時間がもっと短く、かりに 10 分後だったとしても、そのことによって過去の痛みを好む私たちの選好に影響はないだろう。[Dorsey, 2017, p. 358]

パーフィット事例で苦痛の記憶を除外して比較することは、含まれる要素の対等性を基準にすれば公平だが（パーフィットの指摘）、過去と未来に対して通常私たちがとる態度を基準にすれば不公平である（ブリンクの指摘）。

パーフィット事例で比較されているのは、予期される未来の痛みと、自分では少なくとも部分的に覚えていない（想像される）過去の痛みである。パーフィット事例で患者が過去の痛みを覚えていないことが、私たちが過去の痛みを割り引く傾向をもつことにつながっているのかもしれない。たとえば、手術をすでに終えた患者であれば、手術の記憶なしに生きていくという確証があるが、手術をこれから控える患者であればその確証をすでに手にしているわけではないことが要因なのかもしれない [Lee et al., 2020, p. 4]。また、想起できる過去の痛みと違って、たんに想像されるだけの過去の痛みはそれが実際にどのくらい苦痛だったかを判断することが難しいため、私たちは苦痛を主観的にそれほど大きなものと見積もらないのかもしれない。あるいは、苦痛を想起できることは（そうした苦痛を想起することに伴う苦痛とは別に）それ自体で不幸であると私たちは考える傾向にあるのかもしれない。

こうした可能性は、パーフィット事例で私たちが過去の価値を割り引くことの部分的な説明でありうるが、しかし説明のすべてではありえない。R. リーらの実験では、忘却を含まない事例でも私たちはパーフィット事例と似た過去の割引をすることが明らかになっているからだ。実験 1a の「時間的選好課題」では、ヘドニックな経験のあいだの自分の選好を尋ねるような課題が大人の被験者たちに与えられた。この実験では、被験者たちは二人の人物の図を見せられた。苦痛を伴う注射や、素晴らしいレストランでの無料の食事といったヘドニックな出来事について、一方の人物は過去に経験して、もう一方の人物は未来に経験することになっている（どちらも今はその出来事を経験していない）旨がその図に描かれている。「あなたはどちらになりたいですか？ (Who would you rather be?)」と尋ねたところ、被験者たちはチャンスレベルよりもずっと高い割合で、快楽を伴う経験は未来に、苦痛を伴う経験が過去にあることを好んだという [Lee et al., 2020]。

記憶という要素の欠如はパーフィット事例における割引の十分な説明ではないとしても、未来バイアスについての議論一般に影響する次の点については指摘することができるだろう。記憶の有無をはじめとして、ある出来事と私たちのあいだに成り立つ関係はその出来事が過去にあるか未来にあるかでそもそも質的に異なり、時間的位置だけが違うということがどのような事態を指すかは定かではない。過去の出来事と未来の出来事を公平に比較しようとしても、その公平さの基準は複数ありうる。本稿の冒頭でしたのと同じように、未来バイアスは「他のことが同じときに」過去の出来事よりも未来の出来事を重視する、という形で定式化されることが多いが、「他のことが同じときに」が何を指すかの点ですでに議論を必要とする。こうした点については、今以上に議論が進められるべきだろう。

3.2 未来を重視するとはどういうことか？

記憶だけではパーフィット事例で私たちが割り引く理由を説明することはできない。それでは、パーフィット事例と他の事例とをいったい何が分けているのだろうか。この問いに答えるには、パーフィット事例で未来の経験が重視されるという意味を正確に掴んでおく必要がある。

そのためには、人称の事例とパラレルに考えることが役に立つ。いま、あなたともう一人の見知らぬ人のどちらかが苦痛を伴う手術を受けなければならないとわかったとする。ここで二人の生理学的構造には大差がなく、同程度の刺激に対して同程度の痛みを感じるのだとしよう。あなたはその他人が手術を受け、自分は受けないことを望むだろう。そしてその他人が手術を受けなければならない患者であると判明したとき、あなたは「手術を受けるのが私でなくてよかった」と思う。しかしそれでも「どちらの経験の方が悪いか」という問いに対してあなたは「他人の経験の方が悪い」と答えるだろう。このとき、それが他人の痛みであるという理由だけで、他人が受けている痛み経験について「悪くない」とは評価しないはずだ。あなたは自分ではなく他人が痛みを受けることを望むが、だからといって他人が受けている苦痛の経験の反価値がたいしたものではないと考えたりはしないだろう。つまり、自分ではなく他人が痛みを受けることを好むことと、見知らぬ他人の方が悪い経験をしていると評価することは両立しうる。時間の場合でも同じことが言える。あなたは痛みが未来ではなく過去であってほしいと思うが、だからといって実際に自分が過去に受けた快楽や苦痛の経験が、それが過去の経験であるという理由だけで、たいしたものではなかったと考えたりはしないだろう。したがって、パーフィット事例において過去の 10 時間の苦痛を望むようなひとであっても、ある快楽をもたらす経験が過去になったからといって、ヴィクトリアやビリーのようにその経験の評価を下げたりはしないことに不整合はない。

上記のことが示唆する重要な点は、私たちがある経験を評価する際には二つの方法がありうるということである。人称の場合において、ある経験を単にその内容——どれくらいの善あるいは害悪をもたらすか——だけから評価することもできれば、それを自分との関係のもとで——それを経験するのが自分と他人のどちらであってほしいかという観点から——評価することもできる。それと類比的に、一方で、ある経験をその内容——どれだけの善あるいは害悪をもたらすか——だけから評価することもできれば、他方で、現在の自分との関係のもとで——それを経験するのが過去と未来のどちらであってほしいかという観点から——評価することもできる。前者の評価方式を**「内容モード」**、後者の評価方式を**「関係モード」**と呼ぶことにしよう。痛みの経験が自分と他人のどちらであってほしいかが焦点になる先の手術の事例と同様、手術が過去であるか未来であるかが焦点になるパーフィット事例は、関係モードのもとでの未来バイアスの例であることになる[*21]。

いっぽう、ドーアティ事例やカルーソらの設定する状況では、内容モードが採用されると考えることができる。これらは、パーフィット事例のように痛みを受けるのが過去と未来のどちらであってほしいかが焦点になる状況ではなく、過去あるいは未来の経験がどれくらいの価値をもつかを評価するような事例である。そのため、単に他人の痛み経験がどれくらい悪いかを評価する場合と同様に、内容モードが採用されやすいと考えることができる。するとカルーソ型 TVA は、内容モードのもとでの未来バイアスの例であることになる。評価方式が異なっているため、パーフィット事例のように関係モードが採用されるケースで私たちが未来と比べて過去の価値を割り引くとしても、内容モードが採用されるケースにおいて、一人のひとが未来と過去の経験を比較するときも同様の割引をするとは限らない。むしろ、カルーソらの実験の個人内分析は、私たちがそうした状況では未来バイアスを示

[*21] パーフィット事例と若干のシナリオの相違はあるが、前述のリーらの実験についても同じことが言えるだろう。

さないことを支持している。

ドーアティ事例は現実の過去の経験がどれくらいの価値をもつかを評価する事例であるが、グリーン＆サリヴァン事例や新・レストラン事例においては、現実のシナリオと仮想のシナリオが比較される。前節で論じたように、グリーン＆サリヴァン事例で二枚のクッキーを食べたことを後悔しない、または新・レストラン事例で「A コースがよかった」と思うひとが実際に多数であるならば、出来事の時間的位置が異なる現実と非現実のシナリオを比較する場合には、内容モードが採用されやすいということを示唆するかもしれない。だが、各状況に評価方式がそれぞれ厳密に対応していると想定することは避けるべきだろう。実際、筆者の身の回りのひとに尋ねたところ、新・レストラン事例で「B コースのほうがよかった」と思うひとも少数ながらいた。そうだとすれば、現実のシナリオと非現実のシナリオとを比較する事例に内容モードが固定的に対応していると考えるのは難しい。「B コースのほうがよかった」と思うひとがいれば、それは新・レストラン事例の二つのシナリオ——4000 円相当の A コースを昨日食べる仮想のシナリオと、2000 円相当の B コースを今日食べる現実のシナリオ——を関係モードのもとで比較しているからかもしれない。もし A コースが当選していれば、現在、自分はそのコース料理を食べ終わってしまった状況にあるが、B コースに当選しているのであれば、現在、これから料理を食べられる状況にある。自分の現在の状態がどちらであってほしいかという観点から見るなら、B コースが当選する現実のシナリオを仮想のシナリオよりも高く評価することになると推察される。

関係モードの未来バイアスと内容モードの未来バイアスは「未来を重視する」ことの二つの意味の違いとして捉えることができるだろう。一つは「良い経験が過去ではなく未来であることに価値を置く」という意味で、もう一つは「未来の良い経験そのものに過去の良い経験そのものよりも高い価値を置く」という意味である。前者においては経験の時間的位置が評価され、後者においては経験それ自体が評価されると言えるだろう[*22]。まさに経験の時間的位置が焦点になるパーフィット事例で私たちの多くは「苦痛が過去であってほしい」と思うが、それは苦痛が未来ではなく過去にあることに対する肯定的な評価である。それに対して、過去および未来の経験に対してそれに見合った金額を割り当てるカルーソ型 TVA は、過去および未来の経験そのものに対する評価である。そしてドーアティ事例でヴィクトリアは——彼自身の言葉を用いれば——過去の「食事が自身にとってどれくらいの価値がある」かに応じて金額を支払うことを踏まえると、この事例でのヴィクトリアの割引は食事そのものの価値の割引だと考えるのが自然だろう。少なくとも、食事がどれくらいの価値をもっているかを聞かれた際に、ヴィクトリアのように食事の価値を割り引くことが、パーフィット事例に見られるものと同じ種類の未来バイアスであるかは疑わしく思われる。

関係モードと内容モードの区別をこれまでの論者たちは捉えそこなってしまったために、カルーソ型 TVA をパーフィット事例に見られる種類の未来バイアスと一緒くたにして論じたり、グリーン＆サリヴァン事例やドーアティ事例において割引が生じない理由（近さバイアス、後悔特有の事情な

[*22] 関係モード／内容モードの対は、経験の時間的位置についての評価／経験それ自体の評価という対におよそ対応するため、ドーアティのいう〈今の私の視点〉と〈人生全体の視点〉の対とは重ならないことに注意してほしい。 内容モードはある経験の内容——どれだけの善あるいは害悪をもたらすか——だけから評価することであって、そこに「自分を時間的に延長した行為者としてみなす」といった含意はない。

ど）を各々の事例に対して与えようとしたりしてきたのだと思われる。つまり、第 2 節で見た既存の見解は、私たちがもっている未来バイアスがどのようなものであるかという記述的問題について見誤っていたことになる[*23] 。

3.3 どうして私たちは関係モードで未来を重視するのか？

前節で、私たちのもつ未来バイアスには関係モードにおけるものと内容モードにおけるものがあると主張した。内容モードの未来バイアスは、カルーソらの言うように感情の強度の非対称性で説明されるのかもしれない[*24] 。では、なぜ私たちは関係モードのもとで、過去よりも未来を重視しているようなふるまいをするのだろうか。以下ではこの問いに取り組む。

3.2 で、関係モードのもとで私たちは、ある経験を現在の自分との関係のもとで——それを経験するのが過去と未来のどちらであってほしいかという観点から——評価すると述べた。本稿が提出する仮説は「関係モードで未来バイアスが生じるのは、未来側にしか充足条件をもたない欲求があるからだ」というものである。未来側にしか充足条件をもたない欲求の存在を明白に示すものとして、食欲、睡眠欲、性欲、飲みものを飲みたいといった生理的欲求を挙げることができる。たとえば、あなたが今眠気を感じているなら、あなたのその睡眠欲はこれから寝ることによって充足される。また、ある時点 t において空腹の状態にあり、何かを食べたいという欲求をもっているときは通常、t よりも後の時点で何かを食べることによってその欲求は満たされるだろう。いまその欲求をもっている限り、かりに過去に自分がそれを食べたという事実を知っても、その欲求は充足されたりはしないはず

[*23] 関係モードと内容モード（時間的位置についての評価／経験そのものの評価）の区別は、A. N. プライアー [Prior, 1959] の有名な「終わってよかった！ (Thank goodness that's over!)」という事例を理解するうえでも重要となる。このプライアー事例は、苦痛を伴う歯の手術が終わったときに「終わってよかった！」と安堵できるが、それが未来であるときにそのような安堵を覚えることはないという事例である。プライアー事例はしばしば未来バイアスの一例と考えられており（たとえば [Hare, 2013, p. 508] や [Greene & Sullivan, 2015, p. 952]）、パーフィットも、未来バイアスの合理性を拒否するうえで大きな障害は、そうした場合には「苦痛が過去のものになったときに安堵するのは一般的に不合理である」と考えなくてはならなくなることだと述べている [Parfit, 1984=98, p.186=263]。プライアー事例を未来バイアスの一例としてみなすとしても、「終わってよかった！」はその苦痛の時間的位置、すなわちそれが過去にあることに対する評価であると考えるべきであり、その経験自体の反価値を割り引いていると想定する必要はない。ヴィクトリアが過去の食事経験自体の反価値を割り引くように、過去の痛み自体の反価値を割り引き、その結果痛みの経験がそれほどたいしたものではなくなるならば、どうしてそれほどたいしたものではない痛みの経験が終わったことを喜ぶべきなのだろうか。もちろん、プライアー事例は安堵という情動と強く結びついている事例であるため、それが選好の時間的非対称性であるパーフィット事例と共通のメカニズムに基づいているかについてはさらなる検討の必要があるだろう。

[*24] 感情の強度の非対称性だけで関係モードの未来バイアスを説明するのは困難であると考えられるのは、次のような理由による。第一に、一人のひとが意識的に過去と未来を比べたとき、関係モードでは過去の経験の価値が割り引かれるが内容モードではそうではないという違いがある。もし関係モードにおける未来バイアスが感情の強度の非対称性によって引き起こされるとするならば、（一人のひとが意識的に過去と未来を比べたとき）内容モードでも同じ傾向性によって過去の経験の価値が割り引かれるはずだろう。

第二に、かりに関係モードにおいても感情の強度の非対称性が見られるとしても、それを関係モードにおける未来バイアスの原因と呼べるかは定かではない。人称の事例で考えてみよう。苦痛を受けるのが自分ではなく他者であってほしいと考える私たちの傾向性は、自分の受ける苦痛に他者の受ける苦痛よりも強烈な感情を抱く傾向性によって説明されるのではなく、むしろその逆であるように思われる。もし人称と時間の類比がここでも言えるならば、私たちが未来に対して過去より強烈な感情を向けるとしても、関係モードの場合にはそれは未来バイアスの結果であって原因ではないと考えるのがふさわしいように思われる。

だ。当然のことだが、いまあなたが飢えあるいは渇きの状態にあるならば、少し前に自分が何かを食べていた、または飲んでいたという事実があり、さらにそのことを知ったとしても、あなたがいま飢えあるいは渇きといった状態にあることは依然として変わらないだろう。

食欲や睡眠欲といった生理的欲求のもつこの特徴が、より具体化されたヘドニックな欲求にも受け継がれていると考えられないだろうか。たとえば好物のオムライスを食べたいというヘドニックな欲求について考えよう。いま目を覚ましたあなたは、自分がオムライスを昨日食べたのか、今日これから食べるのかを覚えていないとしよう。そのどちらであってほしいかを考えるとき、すなわち関係モードが採用されるとき、あなたは今日これからオムライスを食べることを望むだろう。本稿の仮説では、それは、オムライスを食べたいというあなたの現在の欲求が、昨日オムライスを食べた経験によって充足されず、ただあなたがオムライスをこれから食べることによって充足されるからである。より一般的に言えば、関係モードのもとで、快楽を伴う経験が過去ではなく未来にあってほしいと思うのは、それが過去ではなく未来に位置することによってのみ充足される欲求を私たちがもつからである。

しかしもちろん、すべての欲求がこのような特徴を有しているわけではない。あなたが打ち込んでいるスポーツの大会がすでに終わったのか、これから開催されるのかを忘れてしまったとする。ひとから聞いたり、あるいは自宅の優勝旗を見つけたりして、実際に昨日優勝したことを思い出せば、あなたはそのスポーツの大会で優勝したいというという欲求にもはや動機づけられなくなるかもしれない。

ここで、未来向きにのみ充足条件をもつ欲求のことを**「時間的欲求」**と呼び、それと区別される後者のような欲求のことを**「無時間的欲求」**と呼ぶことにしよう[*25]。時間的欲求は生理的欲求をはじめ、基本的にヘドニックな経験を望んだり避けたりする欲求であるとしても、ヘドニックな経験についての欲求はすべて時間的欲求であるわけではない。私たち人間には痛みを避けたいという時間的欲求があると同時に、人生全体として見たとき苦痛の総量が少なくあってほしいという無時間的欲求もあるだろう。そして、過去の苦痛と未来の苦痛を比べ、かつ過去の苦痛の方が未来のそれよりも大きいとき、この二つの欲求は衝突するだろう。ここでもしグリーン＆サリヴァンが言うように、過去の経験の割引が絶対的であるならば、時間的欲求の側が全権を握っていることになるだろうし、また、もし絶対的ではなく相対的であるならば、そのときは両者の間で調整が行われていると考えることができる[*26]。

パーフィット事例において過去の 10 時間の経験を選好する理由も、時間的欲求の観点から述べなおすことができる。それは、苦痛を避けたいという現在の時間的欲求を充足するうえで、過去に苦痛を得なかったことはいささかも貢献しないからだ。痛みを避けたいという欲求の充足は、これから苦

[*25] 本稿においては基本的に「選好」は comparative（X より Y を選好する）で、「欲求」は monistic（X を欲求する）であると想定している。バナナよりもミカンが食べたいという選好をもっていることは一般に、数などに関する条件が等しいときにミカンを選ぶことを含意するが、条件が違えばバナナを選ぶことを妨げない。対して、ミカンが食べたいという欲求は基本的にミカンを食べることによってのみ充足され、バナナを食べることによっては充足されない。未来バイアス「選好」、そして時間的「欲求」はこのような区別に沿っている。

[*26] 本節での議論は関係モードにおける過去の価値の割引が絶対的であるか相対的であるかという論点については中立的である。過去の価値の割引が相対的なものであることを支持する実験結果としては [Lee et al. 2020] の実験 3 を見よ。

痛を得るかどうかにのみ依存し、かつて苦痛を得たかどうか（あるいはかつて苦痛を得たことを知るかどうか）には依存しない。かつて痛みを避けたからといって、あるいはそのことを知ったからといって、これからやってくる痛みを避けたいという欲求にもはや動機づけられなくなったりはしない。このような理由で、苦痛が過去にあることは、それが未来にあることに比べればどうでもよいものに思われるのである。

本稿の仮説が示唆する重要な点は、関係モードのもとで未来バイアスが生じるのは、未来と過去のヘドニックな経験をある共通の一つの評価基準のもとで測った場合に未来側が有利であるからではないということだ。未来および過去に向けられる感情や注意、エネルギーのような共通の基準[*27] で測ったときに、未来の方が過去よりも大きいために、快楽は過去ではなく未来にあってほしいと思うのではない。そうではなく、未来バイアスが生じるのは未来側だけが満たせる基準（時間的欲求）があるからだ[*28] 。「苦痛を避けたい」、「オムライスを食べたい」という私たちの時間的欲求が充足される条件は、未来に苦痛を避けること、未来にオムライスを食べることであって、それらが過去に生じたということは現在もっている時間的欲求の充足に貢献しない。本稿の仮説に従えば、欲求の充足条件に関するこの時間的非対称性が関係モードにおける未来バイアスの根本にある。

オムライスを食べたいという時間的欲求は、オムライスを食べるのが過去ではなく未来であってほしいという時間的位置に関する選好につながるが、とはいえそれは、ヴィクトリアのように過去の食事経験そのものの価値を割り引くことを促すわけではない。それはちょうど、あなたと他人が 5 時間の退屈なデータ入力作業を行うとき、その経験の反価値に見合った金額が払われることになっているならば、自分が不快を被るのを回避したいというあなたの欲求が、他人が自分と同額の金額を受け取るのが適当だと思うことを妨げないのと同様であろう。

以上の説明は現時点では一つの仮説にすぎず、他の仮説を退けることを意図したものではない。またかりにこの説明がある程度正しくとも、そのことは未来バイアスに貢献する他の要素の可能性を排除しない。とはいえ、本稿の議論が正しければ、未来バイアスの説明においては関係モード／内容モードの区別を考慮する必要があり、この区別を踏まえた本仮説にも一考の価値があることはたしかだろう。

結

本稿で論じたことを振り返っておく。本稿の問いは、私たちが未来の痛みよりも過去の痛みを選好するパーフィット事例からはじまった。この事例は、私たちが未来バイアスをもつこと、そしてそれが自然であり合理的であることを強く示唆する。第 1 節では、これまでになされてきた議論を概括し、未来バイアス不合理論者による二つの事例——グリーン＆サリヴァン事例とドーアティ事例を確

[*27] サリヴァンたちは、過去よりも未来を重視する私たちの傾向性にこの種の進化論的説明を与えることを試みている。彼女らによれば、未来の出来事はときにコントロール下にあるが、過去はけっしてコントロール下にはないため、未来の出来事により多くの注意とエネルギーを向ける方が生存上有利である [Green & Sullivan, 2015, p. 968; Sullivan, 2018, sec. 5.3]。

[*28] 割引が相対的である場合には、「未来側だけが満たせる評価基準（時間的欲求）があり、さらにその基準が過去側と未来側に共通の評価基準（人生全体の快苦についての無時間的欲求）よりも優先されるから」と言った方がより正確である。

認した。私たちは未来バイアスをもっているはずなのに、どちらの事例でもそこで言われているような仕方ではふるまわないという合意がある。第 2 節では、私たちがなぜそうした仕方でふるまわないのかについての既存の説明を批判した。そこでは新・レストラン事例、カルーソらの実験に訴えて、パーフィット事例から〈過去の経験の価値を割り引く一般的な傾向性〉を導くことが性急である理由を確認した。第 3 節では、経験の評価のモードとして関係モードと内容モードという区別を導入して、どうしてパーフィット事例で価値の割引が生じ、他の事例では生じないのかに新たな説明を与えた。さらに、関係モードのもとで過去の経験の価値が割り引かれる理由を欲求の観点から説明した。その理由は、生理的欲求に顕著に見られるように、未来側にのみ充足条件をもつ欲求（時間的欲求）を私たちがもっているからである。

本稿の中心的な主張の一つは、未来バイアスの記述的問題にいっそうの目が向けられるべきだ、という点にある。これまで最もよく議論されてきた記述的問題は発現条件についての問題、〈私たちはいつ過去よりも未来を重視するのか〉という問題であった。これに加えて本稿では、〈私たちはどのような意味で過去よりも未来を重視するのか〉という問題、そして〈私たちはどうして過去よりも未来を重視するのか〉という問題を扱った。前者について、私たちのもつ未来バイアスは単一の種類ではなく、複数の種類（関係モードにおけるものと内容モードにおけるもの）があると主張した。後者について、私たちが関係モードにおける未来バイアスを示すのは、欲求の本性がかかわっていると主張した。

こうした記述的問題を巡る議論は、規範的問題にも影響する。たとえば、3.2 で述べたように、関係モードと内容モードの区別を導入するとき、ヴィクトリアのような割引がパーフィット事例に見られる「未来バイアス」と同種のものであるかは疑わしく思われる。それゆえ、ドーアティが正しく、ヴィクトリアのふるまいが不自然であり、さらにそれが不合理であるとしても、そこからただちにパーフィット事例に見られる「未来バイアス」の不合理性が帰結するかは議論の余地がある。「未来バイアス」と呼ばれているものが複数の現象を指すのだとしたら、ある現象の合理性／不合理性から別の現象の合理性／不合理性を言うことには慎重になるべきである。

私たちがどのような未来バイアスをもっているのかという問いを扱う上で、実証的な研究は不可欠だろう。とはいえ本稿の指摘が正しければ、現状の議論の一部は「未来バイアス」がどのような現象なのかについて捉えそこねている。生の時間的あり方についての問いについて、こうした概念的混乱を解きほぐし、整理することによって取り組む余地もまだまだあるはずだ。

謝辞

原稿の執筆過程において有益な助言をいただいた青山拓央・梶本尚敏の両氏に心からお礼申し上げたい。また、審査過程において本論文へのコメント・助言をくださった 2 名の匿名の査読者にも感謝する。

参考文献

[1] Brink, D. O. (2011). "Prospects for Temporal Neutrality". in Callender, C. (ed.), *The Oxford Handbook of Philosophy of Time*, Oxford University Press, pp. 353-381.

[2] Caruso, E. M., Gilbert, D. T. & Wilson, T. D. (2008). "A Wrinkle in Time: Asymmetric Valuation of Past and Future Events". *Psychological ScienceI*, 19(8): 796–801.

[3] Dorsey, D. (2017). "Future-Bias: A (Qualified) Defense". *Pacific Philosophical Quarterly*, 98(S1): 351-373.

[4] Dougherty, T. (2011). "On Whether to Prefer Pain to Pass". *Ethics*, 121(3): 521-537.

[5] ——. (2015). "Future-Bias and Practical Reason". *Philosophers' Imprint*, 15(30): 1-16.

[6] Greene, P., Latham, A. J., Miller, K. & Norton, J. (2021). "Hedonic and Non-Hedonic Bias toward the Future". *Australasian Journal of Philosophy*, 99(1): 148-163.

[7] Greene, P. & Sullivan, M. (2015). "Against Time Bias". *Ethics*, 125(4): 947-970.

[8] Hare, C. (2008). "A Puzzle about Other-Directed Time-Bias". *Australasian Journal of Philosophy*, 86(2): 269-277.

[9] ——. (2013). "Time — The Emotional Asymmetry". in Bardon, A. & Dyke, H. (ed.), *A Companion to the Philosophy of Time*, Wiley Blackwell, pp. 507-520.

[10] Hedden, B. (2020). "Introduction to Part Two: Rationality and Time". in Sauchelli, A. (ed.), *Derek Parfit's Reasons and Persons: An Introduction and Critical Inquiry*, Routledge, pp. 30-47.

[11] Lee, R., Hoerl, C., Burns, P., Fernandes, A. S., O'Connor, P. A. & McCormack, T. (2020). "Pain in the Past and Pleasure in the Future: the Development of Past-Future Preferences for Hedonic Goods". *Cognitive Science*, 44(9), e12887.

[12] Parfit, D. (1984). *Reasons and Persons*. Oxford University Press. （森村進 (訳),『理由と人格』，勁草書房，1998 年）.

[13] Lowry, R. & Peterson, M. (2011). "Pure Time Preference". *Pacific Philosophical Quarterly*, 92(4): 490-508.

[14] Prior, A. N. (1959). "Thank Goodness That's over". *Philosophy*, 34(128): 12-17.

[15] Sullivan, M. (2018). *Time Biases: A Theory of Rational Planning and Personal Persistence*. Oxford University Press.

[16] Scheffler, S. (2021). "Temporal Neutrality and the Bias Toward the Future". in McMahan, J., Campbell, T., Goodrich, J., & Ramakrishnan, K. (eds.), *Principles and Persons: The Legacy of Derek Parfit*, Oxford University Press, pp. 85-114.

[17] Velleman, J. D. (1991). "Well-being and Time". *Pacific Philosophical Quarterly*, 72(1): 48-77.

[18] Żuradzki, T. (2015). "Time-biases and Rationality: The Philosophical Perspectives on Em-

pirical Research about Time Preferences". in Stelmach, J., Brożek, B. & Kurek, Ł. (eds.), *The Emergence of Normative Orders*, Copernicus Press, pp. 149-187.

著者情報

山名諒 （京都大学大学院人間・環境学研究科）
藤山拓夢 （在野研究者）